

天声人語

泣いたり笑つたりしながら、ドイツの難民問題を実感できるのが、最近上映された「はじめてのおもてなし」である。ナイジェリアのテロ組織から逃れてきた青年を、ある家族が迎え入れ一緒に暮らし始める。きわどい場面も出てきて、どきりとする▼隣家の人が犯罪者を見るような目を青年に向か「敷地に入ったら警察を呼ぶ」と口にする。難民排斥の小さなデモが家の前で始まる。歓迎したい思い。それでも消せない恐怖心。危うい均衡の上に難民受け入れが成り立っていることを教えてくれる▼その均衡が、ぐらりと揺らいだのか。難民への反発から、与党が地方選挙で劣勢となり、メルケル首相が党首を辞任することになつた。首相の任期は3年ほど残るものの、指導力の低下が危ぶまれる▼難民が到着して間もなく、ドイツの地方都市で取材したことがある。熱心にドイツ語を教える人がいた。自宅に迎える人がいた。受け入れの姿勢は、他国の比ではないと感じた。それでも100万を上回った人数が限界を超えてしまったのだろうか▼ドイツの受け入れ姿勢には、少數者を迫害したナチス時代の反省があるともいわれる。難民への姿勢が手のひらを返すように変わるとは考えにくいし、 생각たくない。すでに各地で仕事に就き、定着し始めた人たちがいる▼映画には、こんなセリフがあった。「今の危機を乗り越えたら、この国の姿や目指す方向が見えてくると思う」。荒波の後に現れるのは、どんな国のかたちだろうか。